

8 地獄のバラッド

「ついに今日 あの人からの便りが届いた
ああ 思いがけない嬉しいお便り」
女は嬉し泣きの涙をぬぐって
深紅^{あか}い封を切った

「恋人よ もはやこの世での万策尽きた
天国で結ばれる望みも無し 吊いの鐘が
二人の結婚の鐘 そして二人の初夜の炉端は
玉石敷き詰めた地獄^{ゆか}の床」

5

顔から血の気が引いて
目は青白^{ろうそく}い蠟燭の光を放った
脅えた様子で辺りを見回し
歯を食いしばって読み進んだ

10

「出獄^{かな}すること叶わず
ここで 日一日と朽ちてゆくばかり
忌み嫌^{いとこ}うあの従妹のブランシュとの結婚を
うんと言わない限り

15

「鋭く研いだ短剣で 真夜中に
自分は命を絶つ ほかに手は無い
わが愛する女神よ 今夜地獄で会ってくれ
たとえ何があろうとも」

20

顔青ざめて 女は高笑いした
黄金^{きん}のベルトを巻き
宝石をちりばめた象牙の扇を手に
色鮮やかな祈禱書^{ひざまず}に 跪いた

それから立ち上がって 「わたし どうかしたのかしら」
扇をたたきつけ 黄金^{きん}のベルトをはずし
代わりに 革^{かわ}のベルトを巻いて
短剣を脇に差した

25

部屋で震えながら
家中が寝静まるのを待った 30
怯むこと無く死を見つめた
契りを守るために二人は罪を犯すのだ

やがて 夜の垣根と木立の脇を
身を^{かが}屈め 這うようにして出ていった
バラの茂みが魅惑的な香りを放ち 35
幸せな思い出を蘇らせた

女は倒れ しばらくじっとしていた
悲嘆にくれて草地を^か掻いた
夜露に濡れた草が顔に触れて我に帰り
立ち上がると 裾をからげて駆け出した 40

月が現れ じっと下界を見下ろしはじめると
女は 姿を見られた夜明けの亡霊のように驚いて
^{ひとけ}人気の無い道を横切り
夜風にざわめく森の中に飛び込んだ

枝が なびく着物に引っかかり 45
森の生きものが 鋭い叫び声をあげた
女は立ち止まらず 逢い引きの櫛の木めざして急いだ
それは 女が通い慣れた道だった

ためらいも無く胸を^{はだ}開け
短剣をぐさりと突き刺し 倒れた 50
まるでひと休みするように横たわり
死んで 地獄で目を覚ました

魂は炎につつまれて
女は地獄の真ん中に坐った
女の耳に 四方から 55
死者たちの悲しい呻きが聞こえてきた

堂々として背が高く真っ黒い悪魔が
突然 女の側に姿を現した
「わたくしは マレスピーナ坊ちやまの花嫁です
あの方はもうお越しでしょうか」 60

「わが^{いと}愛し^こ霊よ ようこそ そなたの寝床へ」

「マレスピーナ様はいらしてますか」
「とんでもない ^{あした} 明日あの男は
^{いとこ} 従妹のブランシュと結婚するはず」

「うそよ あの方は今夜わたしと一緒に死にました」 65
「違う あれは計りごと」 「いいえ そんな」
「^{いとこ} 愛し霊よ うそではない」
「わたしたちは真夜中に死んだのです あの方とわたしは」

悪魔は去った ^い 呻きを抑え
思いの丈を激しい祈りに込めて 70
女は地獄の真ん中に身を沈め
じっと男を待った

泣き叫ぶ声 不気味な騒めきの中で
女はつとめて気を鎮めた
地獄の円蓋を充たす血染めの炎が 75
臭いも無く音も無く 女をつつんだ

どのくらい長くそうしていたか
ついに男の裏切りを悟ると
女は 地獄の床を横切って行った
^{ぐんりょう} 群霊は皆 立ち上がって女を見つめた 80

^{くだん} 件の悪魔が 地獄の淵で女を引き止めた
女は悪魔を振り払って 「寄らないで」
「^{いとこ} 愛し霊よ 気でも狂ったか」
「騙されたのよ もうここに用はないわ」

のたうつ混沌の海を横切って女は走った 85
世にも不思議な光景だった
地獄の群霊は黙して 一人の男の到来を待った
巨大な深淵が二人を隔ててゆく

女には それは美しい牧場のようだった
花々が一斉に足元に咲きはじめた 90
女は天国に入り 階段を上って
神の御座に ^{ぎよざ ひざまず} 跪いた

^{してんし} 熾天使や聖者たちが声を合わせて
恐れを知らないその魂を迎えた

女の魂が喜ぶ^{さま}様子に驚いて

95

地獄が一齊に^{いっせい} 半ば人間のしゃがれ声で喝采した

(山中光義訳)